

Mansfield Park における田園主義的イングリッシュネス ——Principles の判断基準として

加藤 千博

はじめに

Jane Austen (1775-1817) の *Mansfield Park* (1814) は、貧しい家から裕福な家に預けられた主人公 Fanny が苦難を乗り越え恋を实らせて、従兄妹で准男爵家の次男である Edmund と結ばれる物語である。幸福な結婚で終わる点で Austen の他の作品と同様のストーリー展開となっている。しかしながら、登場人物のほとんどがハッピーエンドで終わる他の作品と比べて、この作品には不幸な結末を迎える者たちが少なからずいる。とりわけ、Fanny と Edmund にそれぞれ恋をした都会出身の資産家 Crawford 兄妹と Edmund の妹 Maria、そしてその Maria を溺愛する伯母の Norris 夫人の結末は、Fanny や Edmund とは対照的である。

作品中の若者のなかで最も道徳心が高い人物として描かれているのは、牧師を志す Bertram 家の次男 Edmund 及び Edmund の教えに導かれ教養と礼儀を身に着けていく Fanny である。貧しい家庭から伯母の Bertram 家に預けられた Fanny は常に謙虚で強い忍耐力を備えている。一方、可哀想な境遇の Fanny にいつも意地悪な態度をとるのが、伯母にあたる Norris 夫人であり、慈悲心がなく作品中最も嫌味な役柄が与えられている。その Norris 夫人が溺愛する姪である Bertram 家の長女 Maria は、高い教養と礼儀作法を身に着けてはいるものの、甘やかされて育てられたおかげで、虚栄心が高く、道義心に欠けている。彼女はお金持ちの家に嫁ぐも Henry Crawford との不倫の末、没落してしまう。裕福であることが幸福であると考えた享樂主義的な Crawford 兄妹も、その考え方ゆえに恋する相手と結ばれることはない。これらの登場人物の結末から、この作品は正しい principles (道徳心、信念、主義、素性) を持ちあわせたヒロインとヒーローが最終的に報われるという教訓を含んだ恋愛小説として読むことが可能である。

幸せな結婚で終わることが Austen 作品全てに共通する大きな特徴であるが、その場面設定がイングランドの牧歌的な田舎であることも共通した特徴である。丹治はイングランド人の持つ田舎や田園への愛着を「田園主義的イングリッシュネス」と呼び、この概念が 1810 年代に Austen によってイギリス小説に導入されたと論じている(「イングランドの田園」 33)。では *Mansfield Park* の中では、この田園主義的イングリッシュネスの概念はどのように表象されているのであろうか。主人公の Fanny と Edmund はともに自然を深く愛する心を持っている。すると物語上で登場人物たちの行く末の成否を分ける principles には、イギリス独特の価値観である田園風景への愛好が含まれていると考えることはできないだろうか。本稿では、田園主義的イングリッシュネスの観点から主要登場人物を分析することにより、この田園風景への愛好がこの作品のプロットにどのように関わっているのかを解明していく。

1. 田園主義的イングリッシュネスとは

「イングリッシュネス (Englishness)」ということばは、英国人としてのアイデンティティである「ブリティッシュネス (Britishness)」ということばと同一視されたり混同されたりすることがあるが、厳密に言うと、イングランド人の持つアイデンティティや価値観を示す概念である。Robert Burden によると、イングリッシュネスとは“cultural identity”であり“cultural capital”でもある(14)。そしてこのイングリッシュネスという概念を構成する主要素として、田園への回帰という価値観が、現在のイングランド人及び他の英国人にも浸透している。

しかしこのイングリッシュネスという概念は初めから現在のような概念となったわけではない。安西によると、18世紀後半は「自然風の開かれた庭、風景式庭園」(213)こそがイングリッシュネスの典型であったが、19世紀末になるとベクトルが反転し、「閉ざされた、過去思考的なコテージ・ガーデン」(215)こそがイングリッシュネスの典型となったとされている。このベクトルの反転に寄与したのが、丹治の論によれば、Jane Austen の風景観ということになる。Mansfield Park の Fanny が「並木を全部切り倒すなんてひどい」(53)と語るように、Austen は当時流行していたピクチャレスクな庭園への改良に懐疑的である。

18世紀後半の文人 Horace Walpole は、風景式庭園がイギリスの「オリジナル」な発明品であり、「イングリッシュなものであることに異論の余地はない」(“Satirical Poems” 42)と主張しているが、「壁を取り去った結果、あらゆる改良された土地は開かれ、どこを通っても、次々に続くいくつもの絵の中を通っていることになる」(“The History” 270)と述べているとおり、彼の庭園観は「改良」に支えられている。それに対して、19世紀後半の文人、芸術家、社会運動家であった William Morris は小説 *News from Nowhere* (1890) のなかで庭園の改良を批判している。“the philistines were going to landscapegarden it” (67)と登場人物の一人が語るように、Morris はピクチャレスク美学を庭園に適応した風景式庭園に否定的である。自然と人工の理想的比率における Morris の庭園観は、丹治によると、Austen と顕著な類似性を持っている(「イングランドの田園」37)。

Raymond Williams は Austen 作品で描かれる牧歌的な田園風景をはじめ、当時の「風景画、風景論、風景式庭園・建築」には「農村労働や農村労働の姿」が排除され中産階級の視点でしか田舎の風景が描かれていないと指摘する(120-26)。確かに Austen 作品は中産階級と上流階級の登場人物でほとんど占められており、Thomas Hardy の作品に見られるような農村労働者階級の視点が欠如している。よって、Austen の導入した田園主義的イングリッシュネスの概念は、中産階級と上流階級による田園への愛好という意味合いが強い。しかしながら、先に見た Morris の *News from Nowhere* で描かれているのは階級のない社会であり、田園主義的イングリッシュネスが全てのイギリス国民に享受されたものとなっている。Morris は古建築保護協会での活動を通じて環境保護運動を行っており、ナショナル・トラスト設立者の一人である Octavia Hill とも協力関係にあった。Austen の小説 *Pride and Prejudice*

(1813)に登場する Mr. Darcy の Pemberley のようなカントリーハウスと呼ばれる大邸宅と大庭園は、一般公開されてはいたものの、かつては支配者階級の完全な所有物であった。しかし現在では、多くのカントリーハウスがナショナル・トラストの管理下となり、真にパブリックなもの、即ち国民のためのものとなっている。Austen が作品中で示した田園主義的イングリッシュネスの概念は、Morris や Hill に引き継がれ、今や階級を超えた国民的文化となっている。

2. 四つの挿話における田園主義的イングリッシュネス

この作品の物語は4つの大きな出来事を軸にして展開している。それは Sotherton Court 訪問、素人芝居、Fanny のための舞踏会、そして Fanny の Portsmouth への里帰りと幻滅である（中野「あとがき」737-38）。以下ではこれら4つの出来事に際する主たる登場人物たちの言動を田園主義的イングリッシュネスの観点から分析していく。

2.1 Sotherton Court 訪問

Bertram 家の次男 Edmund、長女 Maria、次女 Julia は近所の牧師館に住む London から来た裕福な Crawford 家の Henry と Mary 兄妹とともに、名家の大地主であり Maria の婚約者 Mr. Rushworth の邸宅 Southern Court を訪問する。そこに、Mr. Rushworth と Maria の縁談を取り持った Norris 夫人と、かねてから立派なお屋敷を見学したいと望んでいた Fanny も同行する。

この Sotherton Court 訪問の第一の目的が、この屋敷の庭園をどのように改良するかを議論することであった。これに先立つ第6章の Mansfield Park でのディナーの場面では、Mr. Rushworth は庭を改良することで頭が一杯であり、そんな彼に Maria は風景式庭園の造園で当時有名だった Mr. Repton に依頼するとよいと助言している（51-55）。誰もが人工的に整備された庭へと改良することに賛同する一方で、Fanny と Edmund は次のように会話をしている。

“Cut down an avenue! What a pity! Does not it make you think of Cowper. ‘Ye fallen avenues, once more I mourn your fate unmerited.’” He smiled as he answered, “I am afraid the avenue stands a bad chance, Fanny.” “I should like to see Sotherton before it is cut down, to see the place as it is now, in its old state...”（53-54, 下線筆者）

上記場面から、二人は自然にできた並木道を切り倒すことの愚かさを嘆いており、自然をありのままに残すことが素晴らしいことであるという価値観を共有していることがわかる。対照的に改良に積極的に賛同するのが Mr. Rushworth と Maria に加えて Henry Crawford である。第9章の Sotherton Court の庭園を見学する場面では、この三人は先を歩き、改良に関する“busy consultation”（活発な議論）を行っている（85）。このような庭園の改良に関する議論は当時のピクチャレス美学の流行に依拠するところが大きい。

Austen が William Gilpin のピクチャレスク美学にのめり込んでいたことは、兄 Henry Austen のことばから明らかとなっている (7)。しかし、他の Austen 作品の中にもピクチャレスに関する言及は見られるが、必ずしも彼女が当時のピクチャレスク礼賛の風潮に賛同していたとは限らない。丹治によれば、*Mansfield Park* を執筆した 1813 年の時点では Austen はピクチャレスク美学に批判的であったという (「風景論序説」 80)。これは先の引用にある Fanny のセリフ “What a pity!” を作者の代弁と見做せば、理にかなっているといえる。

このように Sotherton Court 訪問の場面では、当時のピクチャレスク美学の流行に乗って自然庭園を人工的に整備された風景式庭園へと変えることに賛同する者と反対する者に分かれている。反対する Fanny と Edmund が持つ自然に対する価値観は “as it is now” (53) のことばに示されるように「そのままの状態」を保つことであり、この価値観を持つ二人が最終的に報われることになる。

2.2 素人芝居

浪費癖のある Bertram 家の長男 Tom が社交界で知り合った友人 Mr. Yates を Mansfield Park へ招き入れることによって、都会の悪い「ウィルス」が Mansfield の田舎屋敷に蔓延することになる。貴族の子弟であり同じく浪費家でもある Mr. Yates の素人芝居熱に煽られて、みんなで『恋人たちの誓い』の演目を屋敷内で演じることになる。

この素人芝居に反対するのが理性の持ち主 Edmund であり、冷静な判断力を持つ Fanny である。とりわけ、Bertram 家の当主である Sir Thomas が不在であり、屋敷の秩序を守るために必要な principles の基準が曖昧な時に、このような行動をとることに二人は反対する。しかしながら二人以外の若者は皆、素人芝居に大賛成であり、加えて Norris 夫人までもが演技には参加しないものの上演に対しては非常に積極的である。

この芝居騒動においては、Fanny と Edmund の反対派とそれ以外の賛成派という対比構造ができていく。しかしながら、途中でこの対比構造が揺らぐことになる。断固として芝居の上演に反対していた Edmund が Mary Crawford の魅力に負けて、芝居の仲間に加わることになる。その一方で、配役が気に入らない Julia は仲間から抜け出して傍観者となる。結局この芝居は Sir Thomas の突然の帰宅により中止させられるが、Edmund はこの素人芝居というウィルスに少し感染してしまっている。よって彼はこの場面以降徐々に冷静な判断能力を欠いていき、価値観の全く異なるはずの Mary に魅了されていくことになる。

一方、素人芝居への参加を辞めた Julia はこのウィルスに感染することを免れる。Julia は物語の後半で、ウィルスを最初に持ち込んだ Mr. Yates と駆け落ちをし、身を滅ぼす寸前までいく。しかしながら、姉の Maria とは異なり、破滅の一步手前で踏みとどまることになる。父親である Sir Thomas は Maria と Julia の状況の違いを次のように捉えている。

He [Sir Thomas] called it a bad thing, done in the worst manner, and at the worst time; and though Julia was yet as more pardonable than Maria as folly than vice, he could not but regard the step she had taken, as opening the worst probabilities of conclusion hereafter, like her sister's. (419, 下線筆者)

つまり Maria の行ったことは許しがたい vice (罪) であり、Julia の場合は改悛の余地がある folly (愚行) である。

この素人芝居の挿話に関しては、芝居上の人間関係がそれを演じる Maria たち登場人物の人間関係の行く末を暗示していることは多くの批評家が指摘するところである。加えて、都会のウィルスに感染しかけた Edmund の principles が徐々に揺らぎ始めていくこと、そしてウィルスの感染を免れた Julia が principles を完全に喪失することまでは免れたために破滅へとは至らないことも暗示しているといえよう。

London には多くの劇場が集中しており、演劇文化の中心であることは言うまでもない。London に邸宅 (タウンハウス) を持つ上流階級であれば、容易にこの劇場文化を享受し、地方にある屋敷 (カントリーハウス) でその真似事をすることは可能である。Maria や Crawford 兄妹はこの都会的で動的な享楽にふけることを好むが、Fanny と Edmund はそうではない。彼らが好むのは Mansfield Park のような田舎での読書、散歩、ガーデニングといった静的な娯楽である。ここに両者の principles の違いが表れている。

2.3 Fanny のための舞踏会

Fanny の最愛の兄 William の願いを叶えるために Sir Thomas は Fanny のために Mansfield Park の屋敷内で舞踏会を開くことにする。この場面で鍵となるのが琥珀色の十字架である。William からもらったこの十字架をつけて舞踏会に出たいと Fanny は思うが、この十字架につける鎖を持っていなかった。すると Fanny は、Mary と Edmund からそれぞれこの十字架用の首にかけるための品をプレゼントされることになる。このプレゼントも principles の基準を示す重要なアイテムとなっている。

Mary からプレゼントされたのは、彼女が使わなくなったが綺麗な装飾の施された金のネックレスである。“It was of gold, prettily worked; and though Fanny would have preferred a longer and a plainer chain as more adapted for her purpose”(239) とあるように、Fanny にとってはもっと質素な (plain) もの方が自分には似合うと思っていたが、Mary の好意を踏みにじるわけにもいかず受け入れる。しかし実はこの豪華な金のネックレスは Mary の兄 Henry が Fanny のために購入したもので兄妹の策略により、Fanny にプレゼントされるいわくつきのネックレスである。

一方で、Edmund も Fanny のために鎖をプレゼントする。“I hope you will like the chain itself, Fanny. I endeavoured to consult the simplicity of your taste” (241) と Edmund が述べるように、Fanny の好みにあわせたシンプルな鎖であった。“a plain gold chain perfectly simple and neat” (242) と Fanny が表現するように、簡素であるが上品な品に対して Fanny は喜びを表す。

結局は Mary から渡されたネックレスは太すぎて十字架の通し穴には入らず、Edmund からもらった鎖が十字架に通されることになる。これは、Fanny と最終的に結ばれるのが Henry ではなく Edmund であることの暗示として読むことができるが、加えてプレゼントが表象するのが贈り手の principles である。都会的なセンスを持つ Henry からの贈り物は、豪華な装飾が施され Fanny の好みを考慮しないものであり、しかも妹との共謀のうえでの戦略的な贈り物である。それに対して、田舎の価値を理解する Edmund からの贈り物は、Fanny の好みを理解したうえでの質素で上品な品であり、しかも “My very dear Fanny, you must do me the favour to accept”(245) と添えられた Edmund からの手紙が一層贈り物の価値を高めている。これらのプレゼントのエピソードから、都会の表象である Crawford 兄妹が持つ価値観が豪華、派手、欺瞞である一方で、田舎を表象する Fanny と Edmund の共有する価値観が質素、上品、思いやりであることが浮かび上がってくる。このような価値観の違いは principles の相違に起因すると見なすことができよう。そして最終的に作者 Austen によって勝利を与えられるのが十字架との結合が示すように、Henry よりも Edmund の価値観である。

2.4 Portsmouth への里帰りと幻滅

Henry Crawford からの求婚を拒み続ける Fanny を Sir Thomas は彼女の実家のある Portsmouth へと里帰りをさせる。Portsmouth の実家での貧しい暮らしを思い知らせることにより、何不自由のない Mansfield Park での暮らしのありがたみを理解させ、結婚への心変わりを期待してのことである。ここでは、喧騒的な Portsmouth の町と誘惑に満ちた London という都市が Northampton にある静寂な Mansfield Park と対比を成している。無論、田園主義的イングリッシュネスが見られるのは後者においてである。

物語の終盤では Bertram 家の子供たちは皆 Mansfield Park を離れている。Tom、Maria、Julia はともに London に滞在する。Rushworth 夫人となった Maria 以外は London に長期滞在する正当な理由はない。ただ単に都会での享楽に耽りたいだけであり、Maria 自身も社交界での享楽に耽っている。Crawford 兄妹も Mansfield の牧師館を離れ、London に滞在する。物欲が強く享乐的な彼らにとっては、London という刺激的な都会が最も居心地のいい場所である。一方、Edmund は用事があって時折 London に行くことはあっても長くは滞在しない。正式に牧師に叙任された彼は、Mansfield からさほど遠くはない Thornton Lacey という小さな村の質素な牧師館に住んでいる。

素人芝居騒動後しばらくしてからの第 25 章では、Thornton Lacey の牧師館を巡って、Crawford 兄妹と Edmund の間で次のようなやり取りがされる。

“And I have two or three ideas also,” said Edmund, “and one of them is, that very little of your plan for Thornton Lacey will ever be put in practice. I must be satisfied with rather less ornament and beauty. I think the house and premises may be made

comfortable, and given the air of a gentleman's residence, without any very heavy expense, and that must suffice me..." (224, 下線筆者)

"Mr. Bertram," said Miss Crawford, a few minutes afterwards, "you know Henry to be such a capital improver, that you cannot possibly engage in anything of the sort at Thornton Lacey without accepting his help. Only think how useful he was at Sotherton! ..." (226, 下線筆者)

最初の引用場面では、Thornton Lacey の牧師館と庭を改良することを提案する Henry に対して、Edmund はその案には同意せず、装飾や美しさを控えめにして費用をできるだけ抑えた生活に満足するべきだと主張する。二つ目の引用場面は、それに対する Mary の反応を示しており、邸宅や庭の改良に長けた兄の助言を受け入れることを勧めている。Sotherton Court でのエピソードで見られた価値観の相違がここでも Crawford 兄妹と Edmund の間にはっきりと表れている。最終的に牧師となり田舎で質素な生活を送る Edmund の価値観と、都会での豪華で享乐的な生活を享受する Crawford 兄妹の価値観が相容れることはない。

若者たちは皆 Mansfield を離れたが、Fanny も同じく Mansfield を離れ実家の Portsmouth に3か月間滞在することになる。そこでは Sir Thomas の思惑通り、実家での生活のみすぼらしさを思い知らされる。

On the contrary, she could think of nothing but Mansfield, its beloved inmates, its happy ways. Everything where she now was in full contrast to it. The elegance, propriety, regularity, harmony, and perhaps, above all, the peace and tranquillity of Mansfield, were brought to her remembrance every hour of the day, by the prevalence of everything opposite to them here. (39, 下線筆者)

上記引用が示すように Mansfield Park には上品さ、礼儀正しさ、規則正しさ、調和、平和、静けさがあるが、Portsmouth にはその逆のものしかない。"Such was the home" (39) と Fanny は悲嘆に暮れ、Mansfield への一日でも早い「帰宅」を願うようになる。

このように Edmund と Fanny にとっての居心地の良い理想的な場所は、平穏で静寂な田舎である。この二人は London のような都会や Portsmouth のような雑踏な港町を好まない。これは Maggie Lane が論じているように、騒々しい Bath での生活を嫌い、生まれ育った Steventon や創作活動に専念することのできた Chawton の田園風景に満ちた田舎暮らしを好んだ Austen の価値観と符合する (31-37; 46-49)。上流階級の人々が集った Bath に滞在中 Austen が抱いていたのがノスタルジックな田園への回帰であり、その概念が Fanny と Edmund の principles を形成したといえよう。

おわりに

本稿ではイングランドにおける田園主義という観点から、*Mansfield Park* の作中 4 つの挿話における主要登場人物の principles を分析してきた。「Sotherton Court 訪問」からは、当時流行していた人工的な庭園への改良かそれともありのままの自然がよいかの対比が、「素人芝居」からは、舞台上演という都会的な娯楽かそれとも田舎ならではの静かな落ち着いた娯楽かという対比が、「Fanny のための舞踏会」からは、欺瞞に満ちた豪華な贈り物かそれとも心のこもった質素な贈り物かという対比が、「Portsmouth への里帰りと幻滅」からは、賑やかな都会かそれとも静寂な田舎かという対比が示されていた。そしてこれらの対比全てにおいて後者の価値観を持つ Fanny と Edmund が最終的に報われるという筋書きであった。後者の価値観に共通するものが田園主義的イングリッシュネスであり、自然、静寂、質素という要素を備えている。この田園主義的イングリッシュネスという価値観を principles の一部として登場人物たちがどの程度強く持ち続けているかが、この作品においてはストーリーを構成するうえで大きな要因であったことが明らかとなった。

Austen の小説が英文学史上に与えた影響は論じるまでもないが、Austen 作品が現在でも英文学の人気上位を占めるように、彼女が作品に込めた価値観はイングランドだけでなくイギリス中で広く共有されている。彼女が導入したとされる田園主義的イングリッシュネスの概念も現在のイギリスの文化とナショナル・アイデンティティを構成する重要な要素となっている。ゆえに Austen 作品の世界に入り込むことは、イギリス人の持つ価値観を共有することと同義である。

参考文献

- Austen, Henry. "Biographical Notice of the Author." *The Oxford Illustrated Jane Austen: Northanger Abbey and Persuasion*. Oxford UP, 1965. pp. 3-9.
- Austen, Jane. *Mansfield Park*. 1814. London: Penguin Books, 1996.
- Burden, Robert "Introduction: Englishness and Spatial Practices." *Landscape and Englishness*, edited by Robert Burden and Stephan Kohl, New York: Rodopi Press, 2006. pp. 13-26.
- Lane, Maggie. *Jane Austen and Regency Bath*, published by D. Allison, 2007.
- Mason, William, Horace Walpole, and Paget Jackson Toynbee. *Satirical Poems Published Anonymously by William Mason: With Notes by Horace Walpole*. ca. 1779. Oxford: Clarendon, 1924.
- Morris, William. *News from Nowhere, or, an Epoch of Rest: being some chapters from a utopian romance*. 1890. Peterborough: Broadview Press, 2003.
- Walpole, Horace. *The History of the Modern Taste in Gardening*. 1771. New York: Garland, 1982.
- Williams, Raymond. *The Country and the City*. Chatto & Windus, 1973.
- 安西信一。「コテージ・ガーデン—内向するイングリッシュネス（1）」『美学芸術学研究』28 巻、東京大学大学院人文社会学研究科、2009 年、pp. 211-58.

- 日下隆平. 「イギリスの中世主義—ウォルポールとモリスの間にあるもの—」『人間文化研究』第8号、桃山学院大学、2018年、pp. 73-100.
- 丹治愛. 「ウィリアム・モリスの『ユートピアだより』 ナショナル・ヘリテージとしてのイングランドの田園」『英文學研究 支部統合号』第9巻、2017年、pp. 99-106.
- . 「ジェイン・オースティンの風景論序説—ピクチャレスクからイングランド的風景へ」『19世紀「英国」小説の展開』海老根宏、高橋和久編、松柏社、2014年、pp. 67-88.
- 中野康司. 「訳者あとがき」『マンスフィールド・パーク』ジェイン・オースティン著、筑摩書房、2010年、pp. 735-45.

A Study of Pastoral Englishness in *Mansfield Park*: A Criterion for Judging Principles of the Characters

KATO Chihiro

Summary: This paper explores how the idea of “pastoral Englishness” is represented in Jane Austin’s novel, *Mansfield Park* (1814). A common feature of the author’s novels is their English pastoral settings, as well as endings featuring their protagonists’ happy marriages. In *Mansfield Park*, Fanny and Edmund are portrayed as characters whose love of the countryside and adherence to conventional morality are finally rewarded. Therefore the novel can be interpreted as a romance with a traditional lesson woven into it. This paper analyses the code of principles the main characters unconsciously subscribe to from the perspective of pastoral Englishness in order to elucidate how love for rural landscapes is an integral part of the plot.

The four key episodes under investigation in the story include: the visit to Southern Court, private theatricals, the ball for Fanny, and Fanny’s return home. It is revealed that in each of these episodes Fanny and Edmund share an appreciation for untouched nature, quiet recreation in the countryside, simple heartfelt gifts, and the quiet countryside. Significantly, each of these aspects represents values of pastoral Englishness. It is also critical for the main characters to further uphold such principles of pastoral Englishness as simplicity and tranquility; how successful they are in maintaining such values becomes central to the novel’s plot resolution.